

## 修辞学と倫理の視点から見た第二コリント書8章と9章の関係

山田耕太

### 1. 8章と9章に関する研究史的回顧

いわゆるエルサレムの「貧しい聖徒たちへの募金」を述べた第二コリント書8章と9章の関係については、18世紀後半にSemlerが伝統的な統一説に問題を投げかけて以来、議論が重ねられているが、現在に至るまで見解の一致は見られない。

それらは互いに関連し合った以下のような問題である。すなわち、第一に、既に別の所で分析した1-9章（より正確には1-7章）と10-13章の問題と関連して<sup>(1)</sup>、8章と9章は1-7章と同一の手紙なのか、どちらか一方が1-7章と同一の手紙であるのか、あるいは両方ともそれぞれ単独な断片的な手紙なのか、という手紙の統一性と断片性の問題。第二に、8章と9章は同じ内容の「繰り返し」(Doublette)であるのか否か、あるいは「それ自体で完結した独立したテキストの単位」であるのか否か、という手紙の内容に関する問題。第三に、8章と9章のどちらが先に書かれたのか、という執筆の順序の問題。あるいはまた、8章と9章の両方とも同じ人々に宛てられたのか、それとも異なった人々に宛てられたのか、という手紙の宛て先の問題である。<sup>(2)</sup>しかし、8章と9章の問題は、結局以下の4つのタイプの議論に分類される。

#### (1) 1-7章と8-9章の同一書簡説

この立場は、1-9章と10-13章の相違は認めるが、8-9章は1-7章の続きであり、第二コリント書は二つの手紙によって成り立っている、という二つの異なる立場を代表する。

第一に、1-9章と10-13章は別の手紙であり、この順序に書かれたというSemler-Windish説に基づくBarrettやFurnishの注解書などの立場である。<sup>(3)</sup>しかし、以下に述べるようにSemlerとWindish自身はこの立場とは異なる。

第二に、1-9章と10-13章は別の手紙であるが、これとは反対の順序で書かれたというHausrath-Kennedy説や、その説に立つPlummerの注解書などの立場である。<sup>(4)</sup>

## (2) 1-7章と8章の同一書簡説

この立場は、第一に、1-7章と8章の関連は見出すが、9章1節の“*περὶ μὲν γὰρ*”は新たな書簡の始まりを意味する言葉であって、8章と9章の間に断絶があり、また内容の面で見ても8章と9章が同じ内容の「繰り返し」であって、両者は同じ人々に宛てられた手紙ではなく、8章はコリントの信徒に宛てられ、9章はその周辺のアカイア地方に住む信徒に宛てられたものであると考える。すなわち、1-8章、9章、10-13章の順に書かれたと考える。以上は、Semlerと Windisch自身の立場であるが、9章がアカイア地方に宛てられた手紙である、という点を除いて、MartinやThrallの注解書などによっても支持されている。<sup>(5)</sup>

第二に、Hausrath-Kennedy説に基づくNickleやLangは、10-13章、1-8章、9章の順に書かれたと考えるが、Héringと Verbrugge は、8章と9章の順序を入れ換えて、10-13章、9章、1-8章の順で書かれたと考える。<sup>(6)</sup>

第三に、Hausrath-Kennedy説を発展させて、2:14-7:4は独立した手紙の一部であり、10-13章と同一視される「涙の手紙」の一部である、というWeiss-Bultmann説の中で、Bultmannは8章よりも9章の方が先に書かれたとして、2:14-7:4+10-13章+9章、1:1-2:13+7:5-16+8章の順で書かれたと考える。<sup>(7)</sup>

第四に、Weiss-Bultmann説をさらに発展させて、2:14-7:4は独立した手紙の一部であるが、10-13章と同一視される「涙の手紙」とは異なり、それに先行して書かれた、というSchmithals-Bornkamm 説のBornkammも、2:14-7:4、10-13章、1:1-2:13+7:5-16+8章、9章の順で書かれたと考える。Schmithalsは、第一コリント書と第二コリント書の両者を分割して組み合わせ、また説を何度も変更しており複雑であるが、第二コリント書のみに限って見ると、6:14-7:1、2:14-6:2、6:3-13+7:2-4、10-13章、9章、1:1-2:13+7:5-8:24の順で書かれたと考える。<sup>(8)</sup>

## (3) 1-7章と9章の同一書簡説

Weiss-Bultmann説のWeiss は、Bultmannと異なり、8章は第一コリント書の直後に書かれ、7章には9章が続くとし、8章、2:

14-7:4+10-13章、1:1-2:13+7:5-16+9章の順序で書かれたと考える。それに対して、Vielhauer は8章はテトスと二人の兄弟を派遣するための推薦状であって一番最後に置かれたものであり、8章よりも9章の方が先に書かれたとし、2:14-7:4+10-13章、1:1-2:13+7:5-16+9章、8章の順で書かれたと考える。<sup>(9)</sup>

#### (4) 8章と9章の独立書簡説

GeorgiとBetzは、Schmithals-Bornkamm 説に基づいているが、8章と9章は、それぞれ第二コリント書の他の部分には見られない募金について取り扱っており、「それ自体で完結した独立した」内容の手紙であり、8章と9章はこの順序で書かれ、8章はコリントの信徒に宛てられ、9章はコリント周辺のアカイア地方に住む信徒に宛てられたもので、2:14-7:4、10-13章、1:1-2:13+7:5-16、8章、9章の順で書かれたと想定する。<sup>(10)</sup>

以上のように、第二コリント書のさまざまな分割説の中でも、8章と9章の問題に関しては、分割説を横断して多様な見解が見られるのである。この他、伝統的な第二コリント書全体の統一説も、他方現在に至るまで見られる。<sup>(11)</sup> しかし、本稿では修辞学という新たな視点から8章、9章の問題を取り上げて論じてみたい。だが、最近の修辞学批評の立場からは、修辞学的批評の開拓的な試みとしてG.A.Kennedy が第二コリント書を法廷弁論であるとするが、8-9章、10-13章はそれぞれ別な手紙であり、後からコリントに送られた手紙を編集段階でまとめたとする。H.D.Betzは既に述べたように8章と9章はそれぞれ独立した断片的な手紙であるという立場で注解書を書いた。さらに、F.W.HughesはSchmithals-Bornkamm説に基づいて分析する。B.WitheringtonⅢの社会修辞学的注解書ばかりでなく、J.W.McCantやJ.D.H.Amadorは修辞学的批評の立場から、伝統的な統一説を擁護する。本稿の方法と結論は、以下で述べるようにこれらとも異なる。第二コリント書1-7章の修辞学的分析では、本稿の立場はH.-M.Wünshの分析に近いが、8-9章の分析ではかなり異なる。<sup>(12)</sup> 本稿では、これら最近の修辞学的批評の研究をも視野に入れるが、以下では修辞学と倫理という全く新しい視点を導入して分析していきたい。

## 2. 1-7章と8、9章の関係

最初に問題にしなければならないのは、パウロが8、9章で「貧しい聖徒たちへの募金」について言及する時に、それまでの議論と「話題を全く変えている」<sup>(13)</sup> という認識が正しいのか否か、という点である。以下では、これを「募金」についてのモチーフと「苦難」「慰め」「悲しみ」「喜び」のモチーフに分けて考察する。

### a. 「募金」のモチーフ

パウロは8、9章で「募金」について述べる時には、以下の用語を用いる。<sup>(14)</sup>

“διακονία” (8:4, 9:1, 12, 13; cf.8:19, 20; Rom.15:25, Cf.3:7, 8, 9 [dis], 4:1, 5:18, 6:3, 11:8, [3:3])

“χάρις” (8:4, 6, 7, 19, cf.8:1, 9, 16, 9:8, 14, 15; 1 Cor.16:3, Cf.1:2, 12, 15, 2:14, 4:15, 6:1, 12:9, 13:13)

“κοινωνία” (8:4, 9:13; Rom.15:29 Cf.6:14, 13:13)

“λειτουργία” (9:12, Rom.15:27)

“ἀπλότης” (8:2, 9:11, 13.Cf.1:12, 11:3)

“εὐλογία” (9:5 [dis]; Rom.15:28, cf.9:6 [dis])

“ἀδρότης” (8:20)

パウロは「募金」そのものを指す言葉として、“διακονία” と “χάρις” という二つの特徴的な言葉を用いる。だが、これらの言葉は、「誇り」とともに、1-7章でパウロが使徒職と福音を弁護する中心的な概念である。<sup>(15)</sup> しかも、これらの言葉は、若干の例外を除いて10-13章では見られない。

すなわち、パウロによれば、キリスト者の生活全体が「恵み」に由来するばかりでなく(1:2)、パウロの使徒としての活動全体が「神の恵みの下に」あり(1:12)、また宣教活動全体は「恵み」を分かち合うことにある(1:15)。また、その目的は多くの人が神の豊かな「恵み」を受けて(2:14)、神に感謝と栄光を帰すことである(4:15)。さらに、パウロは神に召された人が神の「恵み」を無駄にしないで生活するように勧めるのである(6:1)。

しかし、パウロは使徒としての「務め(=奉仕)」とパウロの福音、ならびに募金や自給自足の宣教方針を含めた宣教活動全体に疑義が

持たれたのである。そこで「弁明」(2:14-7:4)の中で、パウロは自分の使徒職と福音の正当性を証明しようと議論を展開する。それはモーセのように人を罪に定め、死に仕える「務め」とは異なり、人を義として、霊に仕える「務め」であるが(3:7、8、9)、神の恵みによってこのような新しい「務め」を委ねられたのである(4:1)。また、それは異邦人を神と和解させる「務め」であり(5:18)、またこの「務め」が非難されないようにどんな場合にも苦難と節制の中で努めてきたのである(6:3)、と弁明する。

以上のように、二つの鍵概念に即して簡潔に要約した「恵み」と「務め」の弁明をコリント人が受け入れるならば、さらに具体的な行動としてキリストの「恵み」に与る者の「務め」として、パウロに対する疑義によって中断されているエルサレムの「貧しい聖徒たち」への募金活動を再開して、それを成就することを促すのである。すなわち、8、9章での「募金」の議論は、1-7章の議論を打ち切って、「話題を全く変えている」のではなく、パウロの使徒職についての修辞学的議論の「結論」(peroratio)なのである。<sup>(16)</sup>

この点において、Bultmannは8、9章の中心的概念が“*χάρις*”であることを正しく指摘しているが、このモチーフが1-7章の議論の中で展開されていることを見落としている。そればかりでなく、8、9章ではそれと同時に“*διακονία*”が中心的概念であって、それが1-7章とりわけ2:14-7:4の中心的概念の結論として位置づけられていることについても、目が向けられていない。また、Bultmannは1-7章の議論を貫く重要な概念が「誇り」(*καύχημα, καύχησις, καυχᾶσθαι*)であることを正しく指摘している。しかし、このモチーフが、7章の終わりの「誇り」と「恥」を巡る議論(7:14)の後に、8、9章の「誇り」と「恥」の議論にも貫いて見られることを(8:24, 9:2-4)見落としている。<sup>(17)</sup>

#### b. 「苦難」「慰め」「悲しみ」「喜び」のモチーフ

同様に、Weiss-Bultmann説と、それを発展させたSchmithals-Bornkamm説では、2:14-7:4が1-7章の他の部分から独立した手紙であることを前提にしている。しかしながら、Bornkammらは、以下に見られるように「苦難」(*θλίψις*, cf. *θλιβεῖν*)と「慰め」(*παράκλησις*, cf. *παρακαλεῖν*)、「悲しみ」(*λύπη*, cf. *λυπεῖν*)と「喜び」(*χαρά*, cf. *χαίρειν*)という極めて重要な対になるモチ

イーフが、1 : 1 - 2 : 13、2 : 14 - 7 : 4、7 : 5 - 16、8 章、9 章の区別なく、一貫して見られるばかりでなく、10 - 13 章には、極めて稀にしか見られないことを見落としている。

“*θλίψις*” (1:4 [dis], 8, 2:4, 4:17, 6:4, 7:4, 8:2, 13, cf.1:6, 4:8, 7:5)

“*παράκλησις*” (1:3, 4, 5, 6 [dis], 7, 7:4, 7, 13, cf.1:4 [tris], 6, 2:7, 7:6, 7, 13, 13:11)

“*λύπη*” (2:1, 3, 7, 7:10 [dis], 9:7, cf.2:2 [dis], 4, 5, 6:10, 7:8 [dis], 9 [tris], 11)

“*χαρά*” (1:24, 2:3, 7:4, 13, 8:2, cf.2:3, 6:10, 7:7, 9, 13, 16, 13:9, 11)

すなわち、キリストの「苦難」を通して神の「慰め」に与ったキリスト者は、「苦難」の中にいる人々を「慰め」ることができる(1 : 3 - 7)。このことは、パウロがアジアでの具体的な経験を通して学んだばかりでなく(1 : 8)、「悲しみの出来事」の後にコリントに派遣して帰還したテトスとマケドニアで再会し、テトスが慰められた喜びの報告を聞くことによっても経験したことである(7 : 5 - 13)。

パウロが経験した具体的な「悲しみ」とは、度々変更した旅行計画を中断した「悲しみの出来事」である(2 : 1 - 4)。この出来事に関しては、パウロばかりでなく、コリントの共同体全体も、さらには後になって当事者自身も「悲しみ」を経験した(2 : 5 - 6)。しかし、この出来事も「涙の手紙」が功を奏して、本来あるべき「喜び」の関係を回復することができた(1 : 24、2 : 3、7 : 7 - 16)。

以上のように簡潔に述べたパウロとコリントの共同体の「苦難」と「慰め」、「悲しみ」と「喜び」の関係についての言明の間に、パウロの使徒職と福音についての「弁明」(2 : 14 - 7 : 4)が挿入されているのである。この点については既に他の箇所でも詳細に論じたことであり、詳細は繰り返さずに要点のみ述べるが、2 : 14 - 7 : 4 は別の断片的な手紙が挿入された箇所ではなく、修辞学的な議論の「逸脱」(digressio)であり、逸脱した内容はその前後で言及されている「悲しみの出来事」でのパウロ批判そのものに対する「弁明」なのである。<sup>(18)</sup>そこでパウロは、キリストの「苦難」に共に与る福音が弁明し(4 : 8、17)、「苦難」の中でも「務め(奉仕)」を果たして「悲しみ」の中でも逆説的に「喜ぶ」使徒職を弁護する(6 :

4、10)。そして、2:14-7:4の結びである7:4で、その前後の1:3-2:13、7:5-16の主要なモチーフである「苦難」「慰め」「喜び」のテーマを再現させて、結論づけている。すなわち、2:14-7:4は、その前後の文脈とは無関係な独立した断片的な手紙ではなく、7:4が端的に示すように、その前後の議論と密接に関係づけられているのである。

もし以上の議論が正しければ、「苦難」「慰め」「悲しみ」「喜び」のモチーフは、「募金」に関する8、9章でどのように展開されているのであろうか。それは、パウロが弁明する、キリストの「苦難」と「慰め」に与って、「苦難」の中でも「喜ぶ」福音とその「務め(=奉仕)」(*diakonia*)を受け入れるならば、その結論としてパウロが推し進めている具体的な「奉仕(の業)」(*diakonia*)である「募金」を再開して、成就することが勧められる。すなわち、マケドニア人が「苦難」の中でキリストの福音に与り、「喜び」の心が溢れて「募金」に参加したように(8:2)、コリント人は「募金」に参加することで経済的な「苦難」を招くとは考えないで(8:13)、「悲しみ(の心)からではなく」(9:7b)「喜ばしい心で」(9:7c, *ílapón*)募金することが勧められるのである。ここからも、1-7章の議論が、8、9章でも貫かれており、8、9章で「話題を全く変えている」のではないことは、明らかである。そうではなく、8、9章は1-7章の議論の「結論」に相当するのである。

### 3. 修辞学的「結論」(peroratio)の機能

以上の議論で、8、9章は1-7章に連続した議論であり、1-7章の結論に相当することが明らかにされた。以下では8、9章を詳しく分析する前に、修辞学的議論の中での「結論」の部分では、何が述べられ、その目的は何か、という視点で、アリストテレスからアプシネスまでの修辞学のハンドブックを通史的に見渡して、修辞学的議論の「結論」の機能を検討しておきたい。

プラトンは、現存していないが、紀元前5世紀にソフィストたちの間で広まっていたと思われる修辞学ハンドブックの内容を反映して、「パイドロス」の中で、修辞学的議論の機能について「話の最後にあたって、話された事柄について、聴衆にそのひとつひとつを要約しておもいださせること」としている。<sup>(19)</sup>しかし、紀元前4世紀

に書かれたアリストテレス『弁論術』によれば、修辞学的議論の中で、「結論」は、さらに詳しく論じられて、次の4つの機能を果たす。

(20) すなわち、

- ① 聴き手に自分には好意的な気持を抱かせ、対立する相手には悪意を抱かせること
- ② 弁論の要点を誇張して見せたり、過小にして見せたりすること (αύξησης, ταπεινώσις)
- ③ 聴き手が特定の感情を抱くように仕向けること (πάθος)
- ④ 記憶を整理すること (ἀνάμνησις)

しかし、アリストテレスは今日では失われて断片しか伝わっていない『テオデクテス宛修辞学』では、『弁論術』の記述を修正して、「各々の感情に訴えて、聴き手に好意的な印象を与えることが結論の主な機能である」として、以下の3点を挙げる。(21)

- ① 感情に訴えること (πάθος)
- ② 称賛したり、非難すること (ἐπαινος, ψέγος)
- ③ 議論されたことを記憶させること (ἀνάμνησις)

かつてはアリストテレスの作とされたが、現在ではアナクシメネースに帰される紀元前4世紀の『アレクサンドロス宛修辞学 (アレクサンドロスに贈る修辞学)』では、以下の3つの機能が指摘されている。(22) すなわち、

- ① 議論の要約 (ἀνακεφαλαίωσις)
- ② 憐れみの情を含めて聴き手の好意を得ること (ἐλεός)
- ③ 対立する相手に不信を抱かせること (δείνωσις)

ギリシアの修辞学の伝統を継承した中世までキケロの作とされていたが、現在ではコルニフィキウスに帰される紀元前1世紀の『ヘレンニウス宛修辞学』では以下の3つの機能が指摘される。(23)

- ① 議論の要約 (enumeratio)
- ② 強調 (amplificatio)
- ③ 憐れみに訴えること (commiseratio)

同じくギリシアの修辞学の伝統を継承した紀元前1世紀のキケロは、『構想論 (発想論)』の中では、「結論」の役割として以下の3点を挙げている。(24)

- ① 議論の要約 (enumeratio)
- ② 聴き手への嘆願 (indignatio)
- ③ 聴き手への哀願 (conquestio)



しかし、キケロの時代以降になると、「結論」の機能がさらに簡素化されてくる。すなわち、キケロは『構想論』より約40年後に書いた『弁論術の分析』では、以下の2点にまとめている。<sup>(25)</sup>

- ① 強調 (amplificatio)
- ② 議論の要約 (enumeratio)

紀元1世紀末にクインティリアーヌスは『弁論家の教育』の中で、以上までの伝統とは異なって、1つの「結論」の中に複数の機能があることを述べるのではなく、「結論」の叙述には、事実に関するものと感情に関するものの2種類あることを指摘している。<sup>(26)</sup>

すなわち、

- ① 議論の要約を目的とした結論 (enumeratio)
- ② 感情に訴えることを目的とした結論 (affectus)

紀元3世紀始めに不詳のセグエリアーヌスも、『政治的演説の技術』の中で「結論」には以下の2種類がある、と述べている。<sup>(27)</sup>

- ① 議論の要約を目的とした「实际的なもの」(τὸ πρακτικόν)
- ② 感情に訴えることを目的とした「感情的なもの」(τὸ παθηματικόν)

最後に、紀元3世紀始めにガダラのアプシネスは、『弁論術』の中で、「結論」の以下の3つの役割を指摘しているが、実際には①と②について詳細に言及しているのみで、③は②の中でほんの一言触れているだけである。<sup>(28)</sup>

- ① 記憶の整理 (ἀνάμνησις)
- ② 憐れみの感情に訴えること (ἐλεός, πάθος)
- ③ 聴き手への嘆願 (δείνωσις)

以上のように、ギリシア・ローマ時代の現存する修辞学ハンドブックの中で「結論」について概観すると、「結論」の機能は複数あるが、それが時代が下るとともに、4つから3つを経て2つへと減少し、最後には一つの機能を持った2種類の結論へと変遷することが指摘できる。これらの変化の中で、変わらないのは、議論を要約して繰り返すことで記憶を新たに作る機能 (ἀνάμνησις, enumeratio) と、感情に訴えて行動に影響を与える機能 (πάθος, affectus) である。また、感情に訴える機能は、強調(αύξησης, amplificatio)によって感情に訴えて行動を引き起こすものと、嘆願 (δείνωσις, indignatio) によって対立する側に対して聴き手に悪感情を抱かせるものと、不正や不運を述べて論者の側に対して聴き手の憐れみの情

(*ἐλεός*, commiseratio, conquestio) を引き起こすものと分かれる。

(29) また、感情よりも理性が尊重されたギリシア的伝統では要約と記憶の機能が強調され、時代が下ると共にローマ的伝統では感情に訴える機能が重視される傾向が見られる。(30)

それでは、どのような感情に訴えたのであろうか。これに関しては、僅かの修辞学ハンドブックでしか触れられていない。アリストテレスは『弁論術』第2巻で、聴き手の心に働きかける感情として、「怒り」(*ὀργή*)と「穏和」(*πραύτης*)、「友愛」(*φιλία*)と「憎しみ」(*μίσος*)、「恐れ」(*φόβος*)と「大胆さ」(*θαρραλέα*)、「恥」(*αἰσχύνη*)と「無恥」(*ἀναισχυντία*)、「寛大さ(親切)」(*χάρις*)と「狭量さ(不親切)」(*ἀχαριστία*)、「憐れみ」(*ἐλεός*)と「憤慨(義憤)」(*νέμεσις*)、「満足」(*εὐπραγία*)と「妬み」(*φθόνος*)、「競争心」(*ζήλος*)と「輕視」(*καταφρονέσις*)、という8組の対概念を挙げている。また、第3巻の「結論」に関する議論では、「憐れみ」「憤慨(公憤)」「怒り」「憎しみ」「妬み」「競争心」「敵意」などを挙げている。(31)

キケロは『弁論家について』の中で、訴えるべき感情として、「憎しみ」と「誉れ」、「悪意」と「善意」、「恐れ」と「希望」、「欲望」と「嫌悪」、「喜び」と「悲しみ」、「憐れみ」と「罰」、という6組の対概念のリストを指摘するが、同じ著作の別なところで個別の感情について述べる箇所では、「愛」「憎しみ」「怒り」「悪意」「妬み」「憐れみ」「喜び」「恐れ」「憤慨」を挙げている。(32)

また、不詳のセグエリアーヌスの『政治的演説の技法』によれば、最初に「憐れみ」「怒り」「恐れ」「憎しみ」「欲望」のリストが挙げられているが、個別の感情を述べる際には、「悲しみ」「恐れ」「欲望」「快楽」のリストが挙げられた後に、「悲しみ」の下位概念として「憐れみ」と「妬み」、同様に「恐れ」の下位概念として「恥」と「苦悶」、「欲望」の下位概念として「怒り」と「復讐心」、「快楽」の下位概念として「隣人の不幸を喜ぶこと」と「達成感」を挙げている。(33)

以上のことから、時代の変遷や個人の概念把握の違いにより、感情の概念地図はかなり流動的であるが、アリストテレス、キケロ、不詳のセグエリアーヌスに共通な基本的な感情の概念として「憐れみ」「恐れ」「怒り」「妬み」「憎しみ」などがあり、それに準じて「恥」や「欲望」が重要な概念であったことが分かる。

#### 4. 8章、9章と修辭學的「結論」の類型

8、9章には、それ以前の議論を要約している記述は、若干の例外を除いて、ほとんど見られない。その代わりに、次節で詳述するが、1-7章の議論を受け入れた「結論」として、さまざまな形で感情に訴えた上で、その具体的な行動として「聖徒たちへの募金」を促すのである。すなわち、8、9章は、感情に訴えるタイプの「結論」である。

次に、「貧しい聖徒たちへの募金」について、パウロ自身は「奉仕(の業)」(*διακονία*)あるいは「恵み(の業)」(*χάρις*)と呼んでいるが、「募金」の動機となっている「貧しい者たちを覚えること」(ガラテア2:10)は、ユダヤ教やユダヤ・キリスト教の文脈では、通常は「施し」(*ἐλεημοσύνη*)あるいは「義」(*δικαιοσύνη*)と呼ばれる行為に位置づけられる(使徒10:2、35、参照)。<sup>(34)</sup> すなわち、次節で分析する大前提として、「貧しい聖徒たちへの募金」すなわち「施し」(*ἐλεημοσύνη*)を訴えること自体が、「憐れみ」(*ἐλεός*)の感情に訴えることになる点を指摘しておきたい。

既に他の所で述べたように、<sup>(35)</sup> 8章と9章は書簡理論の視点で分析すれば、8:1-15と9:1-15の「助言の書」と8:16-24の「推薦の書」に分かれ、修辭學の視点で分析すれば、8:1-24の第一結論と9:1-15の第二結論に分類される。本稿では、修辭學的議論の「結論」の視点から、8、9章をさらに詳細に分析していく。

先に述べたように、修辭學的議論の「結論」の機能として感情に訴えるものには、論者の立場に好意を抱かせ、対立する相手に悪感情を抱かせる、2つの役割がある。この背後にある考えは、それらをより明晰にするためにアリストテレスの「テオデクテス宛修辭學」の言葉を用いれば、「称賛」と「非難」である。

このような視点をを用いて8、9章の構造を分析すると、8:1-7と9:1-5は、コリント人たちよりも遅く「募金」に参加したが、予想以上の成果を挙げたマケドニア人の「称賛」とマケドニア人への「誇り」を中心にしてコリント人に「募金」の再開や成就を促す内容となっている。それに対して、8:8-15と9:6-10は、パウロの募金活動は「他人に安息を与えて、自分たちが苦難を招く」(8:13a b)と批判したり、「食欲である」(9:5 c)と非難して、募金活動に疑問を呈して中止に追い込み、「わずかしき蒔かず」「悲しみ(の心)から」「強いられて」募金する、とパウロに非難される

論敵ないしはその同調者を説得して、「募金」を促すのである。

以上のことから、8章と9章の構造の概要を示すと次の通りである。<sup>(36)</sup>

- |                 |                      |
|-----------------|----------------------|
| (1) 8 : 1 - 7   | マケドニア人の称賛とコリント人への勧め  |
| (2) 8 : 8 - 15  | 論敵への非難と募金の勧め         |
| (3) 8 : 16 - 24 | テトスと兄弟たちを称賛した推薦状     |
| (4) 9 : 1 - 5   | マケドニア人への称賛とコリント人への勧め |
| (5) 9 : 6 - 10  | 論敵への非難と募金の勧め         |
| (6) 9 : 11 - 16 | 共同体の一致と神への感謝と賛美と願い   |

以下では、8章と9章を修辞学と倫理の視点から分析し、8章と9章が同じ内容の「繰り返し」なのか否か、「それ自体で完結した独立したテキストの単位」なのか否か、という視点を念頭に入れて考察していきたい。

#### 5. 8章と9章の修辞学的、倫理的分析<sup>(37)</sup>

まず最初に、7章と8、9章の関係で、7章と8、9章が連続し、7章が8、9章の議論を準備している点をいくつか指摘したい。すなわち、テトスのコリントからの帰還とコリントへの再派遣（7 : 6、14、8 : 6、16-24、9 : 3）、パウロのマケドニア到着と滞在（7 : 5、8 : 1-5、9 : 1-5）、パウロのコリント人に関するマケドニア人への「誇り」（7 : 4、14、8 : 24、9 : 2-4）、テトスのコリント人に対する「熱意」（7 : 13、8 : 16-17）、そしてコリント人の「熱意」（7 : 11-12、8 : 7）と「熱心」（7 : 7、11、9 : 2）への言及である。<sup>(38)</sup>

それでは、8章と9章は、Windish が考えるように同じ内容の「繰り返し」（Doublette）<sup>(39)</sup> なのだろうか、あるいはBetzが主張するように「それ自体で完結した独立したテキストの単位」<sup>(40)</sup> なのだろうか。

#### (1) 8 : 1 - 7

パウロは、1-7章の議論の「結論」として、神の恵みに与って、多くの苦難の中でも喜びに溢れて「募金」に協力したマケドニアの

諸教会について、1-7章の議論を要約して、<sup>(41)</sup> 第一の「範例」(παράδειγμα, exemplum) <sup>(42)</sup> として言及する(8:1-5)。ここでの「範例」の機能は、修辞学的議論の「結論」で歴史的な例を挙げて説得するというよりも、よい倫理的行為の称賛と同時に「模倣」(μίμησης, imitatio) <sup>(43)</sup> に重点が置かれている。すなわち、人々を豊かにするために自ら貧しくなったキリストに倣い(8:9)、自らを神に献げて(8:5)貧しさの中でエルサレムの「貧しい聖徒たち」を豊かにする「募金」に参加したマケドニア人を讃えつつ、マケドニア人の例にコリント人も倣うように、という意味である(1コリ4:16、11:1、フィリ3:17、1テサ1:6、2:14、比較)。

ここでマケドニア人の例を挙げる際に、感情に訴える二つの手法が用いられている。第一に、多くの「苦難」(θλίψις)の中にいるマケドニア人が福音の「恵み」によって「喜び」(χαρά)に溢れ(7:4、1テサ1:6)、極端な「貧しさ」(πωχεία)の中から施すという「寛大さ」の「富」(πλοῦτος)に溢れる(8:2)、という逆説的な二重の「対比」(ἀντεξέτασεις) <sup>(44)</sup> である。第二に、「貧しさ」の中でも「喜び」に「溢れて」期待以上に施したマケドニア人に対して、「すべてのもの、すなわち、信仰、言葉、知識、あらゆる熱心、私たちがあなたがたの中に引き起こした愛に溢れている」(8:7)が「募金」を中止したコリント人、という「比較」(παράθεσις) <sup>(45)</sup> である。これはコリント人がマケドニア人のように「募金」を再開して「溢れる」ことを期待した上での「比較」である。

このように感情に訴える手法を用いて、聴き手にどのような感情を引き起こそうとするのだろうか。それは第一に、ここでは明示的には述べられていないが、マケドニア人とコリント人を同様に比較した9:2-4に明確に述べられているように、「誇り」(καύχημα)に対する「恥」(αἰσχύνη) <sup>(46)</sup> である(7:14、参照)。すなわち、マケドニア人に比べて経済的に優位であるばかりでなく、霊的にも優れている(8:7。1コリ1:5、参照)と「誇る」コリント人が「募金」に参加しない場合の「恥」である。第二に、訴える感情は、霊的にマケドニア人に優るばかりか、「熱意」(σπουδή, 8:7、8、7:11、12)や「熱心」(ζήλος, 9:2、7:7、11)においても負けないと自負するコリント人の「競争心」(ζήλος) <sup>(47)</sup> である。

さて、このようにパウロはコリント人の「恥」と「競争心」に訴えて「募金」の再開を期待する。ここで先に述べた「範例」の倫理

とは、具体的には何を意味するのだろうか。パウロは貧しさの中で期待以上に献げたマケドニア人の行為の中に「寛大さ」(ἀπλότης)<sup>(48)</sup>を見る(8:2)。この「寛大さ」は「単純さ」「誠実さ」「率直さ」などをも意味する言葉であるが、元来は神の前で「単純で真っ直ぐな心」で生活する、というユダヤ教の宗教的な倫理に基づいている。しかし同時に、これは「恵み」(χάρις)の世俗的な側面での「寛大さ」に通じる。この意味では、ユダヤ教倫理の「寛大さ」は、ギリシア倫理の「寛厚」(ἐλευθεριότης)<sup>(49)</sup>にも通じる。「募金」を支えるのは「寛大さ」というエートスであるが、それは「恵み」に基づいた「寛大さ」であり(8:1、9a、「恵み」、参照)、パウロがコリント人に期待するのは、マケドニア人の「寛大さ」に倣うことである。尚、この「寛大さ」という考えは、9:11、13で要約して繰り返される。

## (2) 8:8-15

パウロは次に、より直接的にコリント人に向かって「貧しい聖徒たちへの募金」の再開と成就を促す。そこで最初にイエス・キリストを第二の「範例」(παράδειγμα, exemplum)<sup>(50)</sup>として挙げる。すなわち、「(主は)富んでいたにもかかわらず、あなたがたのために貧しくなり、その貧しさの故に、あなたがたが豊かになったのである」(8:9)。ここには、キリストが「富んでいた」のに「貧しくなり」、その結果「貧しい」他人を「富ます」という二重の逆説的な「対比」(ἀντεξετάσεις)が見られる(8:9bc)。すなわち、これが「愛」(8:8)の行為である。また、これはマケドニア人の「範例」と「比較」できる。しかし、こちらの方がマケドニア人に与えられた「神の恵み」(8:1)よりも根源的である。「主イエス・キリストの恵み」(8:9)そのものだからである。こうして、「範例」は強化されていく。このように「範例」が挙げられているのは、ここでもキリストを称賛しつつ、その行為を「模倣」(μίμησις, imitatio)するためである。すなわち、霊的豊かさを自負しているコリント人は、それがどこに起因するかを考えて、「愛」の満ちたキリストに倣うようにと示唆するのである。

パウロは、ここでは「人の資質のテスト」(δοκιμασία)<sup>(51)</sup>という方法を導入して、感情に訴える。すなわち、「私たちがあなたがたの中に引き起こした愛」(8:7)ではなく、「あなたがた自身の本

当の愛」があるか否かを「テスト」するのである(8:8)。その試金石となるのが「募金」である。パウロがこれほど大胆な発言をするのは、コリントで「募金」が中止になったのは、恐らく「悲しみの出来事」を引き起こした「不正をした人」(7:12)の問題と密接な關係があったと考えられ、ここではパウロの「募金」に反対する理由が述べられているのである。すなわち、パウロの募金に反対した第一の理由は消極的で、「週の始め毎に」分けておくように指示されたにもかかわらず(1コリ16:2)、今手元にまだ想定した額を「持っていない」(8:12)ことである。第二の理由は積極的で、「他人に安逸を与えて、自分たちが苦難を招く」(8:13)という「寛大さ」とは正反対の「けち」(*ἀνελευθερία*)<sup>(52)</sup>な考えである。このようなパウロの論敵に対して「愛」があるか否かを「募金」で「テスト」するのである。尚、この「テスト」という考えは、9:13で繰り返される。

「人の資質のテスト」という方法で、訴えようとする第一の感情は、「競争心」(*ζήλος*)である。「他人(マケドニア人を指すと思われる)の熱意(*σπουδή*)によって」(8:8)このテストを試みると述べて、マケドニア人が示した「募金」への「熱意」がきっかけとなって、コリント人の「愛」を確かめようとするが、そこではコリント人とマケドニア人の「競争心」に訴える。しかし、パウロがここで念入りに畳みかけて訴える第二の感情は、「意欲」(*προθυμία*)である。すなわち、「(募金を)しようとした意欲」(8:11)であり、「募金」を準備し始めて昨年同様に今もなお「意欲がある」と「意欲」に訴える(8:12)。ここでパウロは、「意欲」があれば額の多少にかかわらず受け入れられる、と「意欲」に訴えて「募金」の再開を勧める。

パウロは、「募金」に参加するか否かでコリント人の「愛」をテストという意表を突く方法で、「競争心」「意欲」という感情に訴えて、「募金」を助言するが、そこに見られる倫理的基準は、第一に、言うまでもなく「愛」(*ἀγάπη*)である。キリストの「範例」に倣うようにするために、論敵の考えを越えて彼らを説得する倫理的根拠として、第二に「平等(均等)」(*ἰσότης*)の概念を提示する(8:13、14)。すなわち、「愛」を「平等」の概念で解釈するのである。また、ここでは「余るもの」と「欠けたもの」を交換する、という経済的・物質的な面での「平等」が考えられている。今の時点でコリン

ト人の「余るもの」でエルサレムの貧しい聖徒の「欠けたもの」で補えば、将来立場が逆になった時に、コリント人の必要を満たしてくれるであろう、という論理である（8：14）。尚、「欠けたもの」を「余るもの」で補うという「募金」の理念は、9：12で要約されて繰り返される。

「平等」という概念は、70人訳聖書にも稀であり、パレスチナのユダヤ教には例がほとんど見られず、ギリシアの政治的概念の系譜に遡る言葉である。<sup>(53)</sup> すなわち、「アリストテレスによれば、「平等」は都市と社会の基盤であり、またそれらの「一致」(ὁμόνοια)と「平和」(εἰρήνη)の基礎であり、「食欲」(πλεονεξία)はその反対である」<sup>(54)</sup> アリストテレスの「ニコマコス倫理学」では、「平等」(ἰσότης)は「適法」(νόμιμος)と並んで「正義」(δικαιοσύνη)の一つの形態である。<sup>(55)</sup> パウロはここで論敵の考えを説得するために、「募金」が目指す「キリスト教の共同体の一致」という理念を掲げるに際して、ボリスの政治的理念の基礎にある「平等」という世俗的な意味での「正義」の概念を借用しているのである（9：9、10、「義」[δικαιοσύνη]、参照）。それは、パウロの募金活動が「平等」の反対語である「食欲」(2：11、7：2、9：5、12：17-18)と非難されていたことと無関係ではない。パウロの募金活動は論敵の主張に反して「食欲」ではなく、パウロはここで「平等」の理念を掲げて「募金」への参加を訴えるのである。しかし、パウロはギリシア思想に基づく経済的・物質的「平等」の思想を70人訳聖書の出エジプト記16章18節の言葉を引用して根拠づける。<sup>(56)</sup>

### (3) 8：16-24

この箇所は、「募金」のために派遣するテトスと二人の兄弟の推薦状であり、ここでは三人を讃える称賛の言葉が述べられる（8：16-17、18-19、22、23）。同時に、派遣される人々が信頼に足る人物であることが示され、これらの人々が取り扱う「募金」が、信頼にたることを「人格」(ἥθος)に訴えて示そうとする。「募金」のために、これらの人々を派遣するのは論敵の批判に対して、「募金」に疑念の余地がないことを明らかにするためである（8：20、21）。

第一にテトスである。テトスに与えられた「熱意」が称賛される。すなわち、パウロの勧めの言葉を受け入れて、「さらに熱意をもって」自らコリントに向かった「自発性」が讃えられる（8：16、17）。ま



た、テトスが信頼できる人物であることを「私のパートナー」「共に働く者」(8:23)と表現する。

第二に、テトスと共に派遣された兄弟について、福音について諸教会から「評判のよい者」と称賛され、「募金」のために諸教会から公に選ばれたことを明らかにする。すなわち、「募金」はパウロの私的なものではなく、公的な性格を持つことを明らかにする。また、この兄弟は「募金」のためのパウロの「同伴者」(8:19)と位置づけられる。

第三に、もう一人のパウロの側の兄弟について、しばしば「熱意」があることを確認した人物であり、「さらに熱意をもって」コリントに行くことを決めたことを讃える。尚、この人物は、「募金」のために兄弟たちを派遣する意義を述べた後に言及されているので、直接的に「募金」を担当したのではないのかもしれない(12:18、参照)。以上の3人は、敬意をもって「私たちの兄弟」「教会の使徒」「神の栄光」と表現される(8:23)。

最後に、8章全体の結びとして、「募金」に参加して、「諸教会の顔のために」、コリント人の「愛」を示して(8:8、参照)、パウロがコリント人について彼らに誇った「誇り」(9:2)が「恥」(9:4)にならないように、「誇り」を示してほしいと願う(8:24)。ここでは、「愛」と「名誉」(τιμή)の倫理に訴えて結ぶ。尚、ここで触れられた「愛」と「誇り」は十分に展開されていないが、「誇り」は9:2-5の「誇り」と「恥」という感情への訴えで展開され、「愛」は8:8-15の「平等」の倫理を要約して反映するばかりでなく、さらに9:7c-10の「義」の倫理で展開される。

#### (4) 9:1-5

パウロは、1-7章の「結論」として、再び「募金」について新たに述べる。まず最初に、今度はコリント人を第一の「範例」(παράδειγμα, exemplum)<sup>(57)</sup>として挙げる(9:2)。すなわち、コリント人が昨年「募金」を準備した「意欲」(προθυμία)とマケドニアの諸教会の多数派を動かした「熱心」(ζήλος)である。この「意欲」と「熱心」は「募金」を始めようとした時の「意欲」(8:11、12、19、参照)と「熱心」を指す。コリント人がマケドニア人をも動かしたかつての「意欲」と「熱心」を称賛しつつ、それに倣うようにという意味が言外にある。しかし、コリント人はまだ

「募金」を成就していない。コリント人の「範例」は、「募金」の「始め」についてであり、「終わり」については未完であり、「範例」としても「未完成」(ἀτέλεια) なのである。現状では、コリント人は「反範例」(ἀντιπαράδειγμα, antiexemplum) になりかねないのである。

このようにコリント人を「範例」として議論を始めるが、逆に「反範例」とならないように、2つの感情に訴える方法を用いる。第一は、コリント人は「意欲」もって昨年「募金」を「準備した」(9:2b, 3c)「前もって準備をしている」(9:5b)とマケドニア人に誇ったことと、現在は「募金」は中止してまだ「準備ができていない」(9:5b)、という「対比」(ἀντεξέτασις)である。第二は、パウロに同行するマケドニア人がコリントに到着する前に、コリントに派遣した兄弟たちによってコリント人が「募金」を成就するように促すが、「募金」を達成したマケドニア人と「募金」を完成していないコリント人の「比較」(παράθεσις)である(9:3-5)。

以上のような「対比」と「比較」によって訴える感情は、それぞれ「恥」(αἰσχύνη)と「競争心」(zelos)である。すなわち、マケドニア人に対してコリント人が「募金」を準備したことを「誇った」が、それが成就しなければ、コリント人ばかりでなくパウロも「恥」をかくことになる、と二重の「恥」(9:4)に訴える。また、コリント人の最初の「熱心」(ζήλος, 9:2b)に応じてマケドニア人も「熱意」(8:8)があることを示したが、「募金」を成就するために、パウロはコリント人とマケドニア人の「熱心」と「熱意」という点における「競争心」(ζήλος)に訴える。しかし、ここでは「誇り」に対する「恥」が特に強調されている。

また、「範例」に見られる倫理的基準は、コリント人が「意欲」を持って始めたことがその通り完成し、パウロがコリント人についてマケドニア人に対して誇ったことがその言葉通り実現する、という言葉の「真実」(ἀλήθεια)<sup>(58)</sup>であり、「誇り」と結びついた「名誉」(τιμή)<sup>(59)</sup>である。しかし、ここでは「恥」という感情が強調され、コリント人がマケドニア人と対照的な「反範例」とならないように、という点が強調されている。そこで「反範例」として挙げられる倫理的基準は、言葉の「偽り」(ψεύσις)<sup>(60)</sup>であり、「恥」と結びついた「不名誉」(ἀτιμία)<sup>(61)</sup>である。とりわけここでは後者が全面

に出されている。

(5) 9:6-10

パウロは、「募金」とは論敵が非難するように「食欲」(πλεονεξία)からなされるのではなく、「祝福の贈り物」(εὐλογία)としてなされることをこの段落との繋がりで直前に期待する(9:5c)。ここでは、「食欲」と「祝福」に対応して、「わずかに蒔き、わずかに刈り取る」人と「豊かに(祝福されて)蒔き、豊かに(祝福されて)刈り取る」人(9:6)、「悲しみ(の心)から」「強制(された心)から」献げる人と「喜び(の心)から与える人」(9:7)、という二重の「比較」(παράθεσις)によって感情に訴える。「喜び(の心)から与える人」とは「強制(された心)から」と反対である。ここでも「自発的に」(8:3, 17)喜んで献げるマケドニア人と「強制(された心)から」わずかししか献げないコリント人という「比較」が暗示されるばかりでなく、8:12-13と同じように、わずかにしか献げない問題の原因であるパウロの論敵との対立が背後に想定される。<sup>(62)</sup>

論敵の側とパウロの側の「比較」という手段によって訴える感情とは、わずかな収穫に象徴される「悲しみ」(λύπη)と豊かな収穫に象徴される「喜び」(χαρά)である。また、この背後には「寛大さ」が暗示される。また、その「寛大さ」の源が神であり、「寛大さ」によって「神は喜び(の心)から与える人を愛する」(9:7c)と述べて、それが神の「愛」によることが示される。

次にここでパウロは、神が「恵み」の源であることを「範例」(παράδειγμα, exemplum)として示す。より正確には「神の恵み」の下にいる人を「範例」として示す。すなわち、神は「喜び(の心)から与える人」をあらゆる「恵み」で溢れさせることができる。それはあらゆることにおいて、いつでも、全てを「自給自足」(αὐτάρχεια)<sup>(63)</sup>しつつ、あらゆる良き業に溢れるためである(9:9)。この「神の恵み」の下にある人という「範例」は、キリストの「範例」が示す「恵み」(8:9)を補うばかりでなく、直接「神」自身について言及するので、それよりもさらに根源的である。ここでも8章と「比較」して「範例」が強化されている。パウロによれば、「恵み」で溢れることは「自給自足」の生活と表裏一体をなす。すなわち、「神の恵み」の下で「喜び(の心)から与える人」は、「神の恵み」

に溢れ、「自給自足」の生活の送ることができる、という考えが見られる。ここでは、8章の「余るもの」で「欠けたもの」を満たす、という「募金」の理念(8:14)を修正して、「自給自足」の生活をして献げることで、逆に「神の恵み」に溢れる、という宗教的な動機に基づいた「募金」の理念を新たに述べる。こうして、ストア哲学に由来する「自給自足」の思想が、ヘブライ思想に裏打ちされてパウロ自身の「自給自足」の思想として語られる(フィリ4:11、参照)。また、この「自給自足」の思想は、「自発性」(*αὐθαίρετος*)とも密接に関わるのである。

このような「神の恵み」の「範例」の倫理的根拠として、ここでは「余るもの」で「欠けたもの」を満たす、という8章のギリシア的な経済的・物質的な「平等」(8:13-14)観を修正して、貧しい人に施すことによって逆に神の「恵み」に与る、という旧約聖書・ユダヤ教的な宗教的・精神的な「義」(*δικαιοσύνη*)<sup>(64)</sup>の概念が用いられる。すな

わち、神の「愛」(9:7c)を「義」の倫理で解釈しているのである。その根拠として70人訳聖書の詩篇112:9が引用される(9:9)。そして、そのコメントとして、神は与える人に与えて、「義」の実を成長させて下さる、と述べて、積極的に「義」の「良き業」に与ることを奨励する。

#### (6) 9:11-15 (65)

ここでは、神への「感謝」(9:11-12)と「称賛」(9:13)と「願い」(9:14)、というユダヤ教の「祝福」と同じ形式で讃詠の言葉を唱えて、<sup>(66)</sup>最後に神への「恵み」を祈って結ぶ(9:15)。同時に、8章と9章の「募金」の理念や意義が、要約された言葉で繰り返される。すなわち、9:11-15の讃詠は、8章と9章の両方が一つであることを前提にして書かれている。

第一に、あらゆることで「寛大さ」(*ἀπλότης*)に「富んだ」(*πλουτιζέσθαι*)人々が、神に「感謝」(*εὐχαριστία*)することが願われるが(9:11)、ここに「寛大さ」(*ἀπλότης*)の「富」(*πλοῦτος*)から豊かに施したマケドニア人への言及(8:2)が要約されて繰り返される。

第二に、「募金」の「奉仕」(*διακονία*)の意義は、一方では「聖徒たち」を経済的・物質的な「欠けたもの」(*ὕστερήματα*)で満た

し、他方では「募金」を献げる多くの人々を宗教的・精神的な「感謝」で「溢れさせる」(περισσεύειν) ことである、と述べられる(9:12)。ここでも「余るもの」(περισσεύμα) で「欠けたもの」(ὕστερημα) を満たす(8:14) という経済的・物質的な「平等」(ἰσότης) と同時に、神が「恵み」で「溢れさせる」(περισσεύειν, 9:8-10) という宗教的・精神的な「義」(δικαιοσύνη) の両面が要約されて繰り返される。

第三に、「募金」の「奉仕」(διακονία) という「テスト」(δοκιμή) を通して、すなわち「募金」に参加して「テスト」に合格して、神を讃えることが願われるが(9:13)、ここにも「募金」によって、コリント人に真の「愛」があるか否かを「テストする」(δοκιμάζειν, 8:8)、という8章の見方が、要約して繰り返されている。また、神を讃えるのは、一方では、キリストの福音を告白して、他方では、「寛大さ」(ἀπλότης) を示して、ユダヤ人キリスト教徒ばかりでなく、あらゆるキリスト教徒との「交わり」に入ることで、従順に従うことによってである、と述べる。ここに、福音宣教と募金活動というパウロの使徒職(διακονία) の二重性が端的に示されている。すなわち1-7章(とりわけ2:14-7:4) の使徒の「務め」(διακονία) の「弁明」と8-9章の「奉仕」(διακονία) への「助言」の連続性と両面性が明らかにされるのである。

第四に、エルサレムの「聖徒たち」が祈りの中で、「神の恵み」がコリント人に溢れ出ることを求める「願い」(δέησις) について言及する。ここには、コリント人が「募金」に参加することの「願い」が表明されている。この「願い」は、宗教的・精神的に「神の恵み」で溢れ出たコリント人が、経済的・物質的に「聖徒たち」を豊かに施すことに繋がる、という8:14と9:8を結び合わせて要約して繰り返した期待である。

最後に、「言い尽くせない賜物の故に、神に感謝する」(9:15) と述べて、「募金」を通して表明される「賜物」ばかりでなく、手紙を終始一貫して表現されている「神の恵み」を覚えて「感謝」しているのである。すなわち9:15は、1-9章全体の結びの言葉となっているのである。

以上から明らかなように、とりわけ8章のマケドニア人とキリストの「範例」を9章のコリント人と神の「範例」で補っているが、「募金」の動機として8章の「寛大さ」の倫理を9章の「名誉」の倫

理に修正し、「募金」の理念として8章の「平等」の倫理を9章の「義」の倫理に修正しているのである。また、9:11-15が8章と9章の両方の議論を要約して繰り返して神への「感謝」、「称賛」、「願い」を述べていることにも示されるように、8章と9章は同じ内容の「繰り返し」ではなく、また「それ自体で完結した独立したテキストの単位」でもなく、互いに補足し合う内容であり、9章は8章の内容を前提にして、それを修正加筆しているのである。

## 6. 8章と9章の関係

8章と9章の関係は、Schmithals, Héing, Bultmann, Vielhauer, Verbrugge<sup>(67)</sup>らが考えるように、8章よりも9章の方が先に書かれたのだろうか。あるいはWindish, Georgi, Betz<sup>(68)</sup>らが考えるように、8章と9章は読者が異なり、8章はコリントに宛てられたのに対して、9章はコリント周辺のアカイア地方に住む信徒(1:2、参照)に宛てられたのだろうか。以上の問いに対する答えは、既に述べた前節の結論からも示唆されるのであるが、ここでは9章の内容に基づいて8章と9章の内容を比較しながら、改めて検討したい。

### (1) 8:1と9:1

8:1の“*γκαρίζομεν δὲ ὑμῖν*”は同じ手紙の中で新しい部分の導入に用いられ、<sup>(69)</sup>“*δὲ*”は、単なる移行を示す微小辞である。<sup>(70)</sup>同様に、9:1の“*περὶ μὲν γάρ*”は、Windish, Bultmann, Betzらが考えるように新しい手紙を始める導入句<sup>(71)</sup>ではなく、同一の手紙の新しい部分の議論を始める導入句である。すなわち、“*μὲν*”(9:1)は、“*δὲ*”(9:3)に対応し、“*γάρ*”(9:1)は、直前の“*χαύχσεις*”(8:24)に接続し、その理由を述べようとしているのである。<sup>(72)</sup>この点については、Stowersが“*περὶ μὲν γάρ*”に関するギリシア語の文献を詳しく分析して、「その直前で言われた事柄について、理由・根拠・説明を導入する際に用いる句である」ことを明らかにしている。<sup>(73)</sup>

また、「(聖徒たちへの募金については、)これ以上あなたがたに書く必要はない」(9:1)という表現は、既に述べられていることに補足的な説明を加えるための修辭学的な表現である。<sup>(74)</sup>具体的には、7:14-15で、パウロはテトスをコリントに派遣する際に、コリント人に関してテトスに「誇った」が、それが「涙の手紙」への応答

で「恥」にならずに済んだと述べた。そして、8:24で、「募金」への応答が「誇り」を示すことになる、と一言言及して8章全体を結んでいる。パウロは、8:24で言葉足らずになっている「この部分の誇り」(9:3)に関連する「募金」について、とりわけ9:2-5でさらに詳しく説明しようとするのである。

(2) 8:2-5と9:2

8:2-5では、マケドニア人が第一の「範例」として挙げられ、それとは反対に9:2では、コリント人が第一の「範例」として挙げられる。これはWindish が指摘するように、8章と9章が別の手紙であることを前提にして、「矛盾している」<sup>(75)</sup>のではない。また、Bultmannが指摘するように、9章が先に書かれたことを意味する<sup>(76)</sup>のでもない。マケドニア人はコリント人の募金活動に動かされて「募金」を始めたばかりでなく、9:2には明示的に述べられていないが、既に9章が書かれた時点で「募金」を達成している可能性があるからである。むしろ、コリント人の「意欲」と「熱意」について「範例」として取り上げるのは、既にマケドニア人を「範例」として称賛したことを前提にし、それを「逆転させている」<sup>(77)</sup>のである。すなわち、8章でマケドニア人を称賛した後で、「募金」を促すのに8章より一段と「アイロニー」(*εἰρωνεία*)<sup>(78)</sup>を強めて、コリント人を褒めることから始めるのである。そして、9:2では一方でコリント人を「称賛」する「範例」として用いながら、他方で「募金」を完成していないことを「非難」するニュアンスを含めて「反範例」として用いるのである。さらに、コリント人を明白に「非難」する代わりに、「募金」を完成するためにテスラ兄弟たちを派遣したことについて述べるのである(9:3-5)。こうして、9章では8章より第一の「範例」が強化され、「アイロニー」の意味合いを加えて修正しながら、一層「恥」と「競争心」という感情に訴えて「募金」を促すのである。

(3) 8:16-24と9:3-5

8:16-24と9:3-5で、「募金」を成就するために、テスラ兄弟たちを派遣することが述べられている。だが、9:3-5では、8:16-24を前提にしているために、詳述されていない。また、両者の間では、派遣の意味が異なっている。すなわち、8:16-24で

は「募金」の疑念を解くためであり(8:20)、そのために派遣する人物が推薦に値する人物であり、また諸教会から選ばれたことが言及される。それに対して、9:3-5では、「募金」が成就しないで、パウロのコリント人に関するマケドニア人に対する「誇り」が「恥」にならないためである、とされる。

Bultmannは、この派遣の意味の違いを正しく指摘しているのであるが、ここから8章と9章が異なる手紙である、<sup>(79)</sup>とは言い切れない。8章が9章を前提にして書かれ、前言したことに補足を加え、また修正している可能性があるからである。すなわち、8:16-24の派遣の理由よりも、9:3-5の理由の方が理性的でなく、「恥」と「競争心」という感情に強く訴える内容に変更されているからである。

これと対応して、8:16-24では、派遣に際して「自発性」(*αὐθαίρετος*, 8:17. 8:3、参照)と「熱意」(8:16, 17, 22)が強調されるのに対して、9:3-5では派遣の「必要性」(*ἀναγκάϊον*, 9:5)が全面に出される。また、8章ではそれと関連して、パウロの言葉は「命令」でなく「助言」であることが強調され(*οὐ κατ' ἐπιταγὴν λέγω*, 8:8)、パウロが「判断」(*γνώμη*)とえるが、それがコリント人にとって「有利である」(*συμφέρει*)、とされる。<sup>(80)</sup>

#### (4) 8:6、8:10-12と9:2-5

8:6、8:10-12ではコリントで、テトスの派遣と「募金」の開始と終結について言及されるが、9:2-5ではマケドニア人を同行させるパウロのコリント行き(9:4)とテトスら兄弟たちの派遣による「募金」の終結について述べられる。ここから8章はテトスら兄弟たちの派遣の直前に書かれ、9章は少なくとも意識の上ではパウロのコリント行きの直前に書かれたものであり、マケドニアの状況では書かれた時点が異なるは明らかである。

しかし、8章によれば、コリント人が「募金」の「開始」を意図したのは「昨年から」(*ἀπὸ πέρυσι*, 8:10)であり、9章によれば、アカイアで「準備」されたのも「昨年から」(*ἀπὸ πέρυσι*, 9:2)であり、8章と9章が書かれた時期の違いはそれほどないことが示唆される。さらに、8章で「募金」の再開と終結を促すためにテトスら兄弟たちを派遣する時には、「週の始め毎に」集めるという「募



金」の指示(1コリ16:2)が実施されておらず、あるいは実施されていたが募金活動の中止と共に集めたものが崩されて、想定された額を「持っていない」状況で、「持ったままで受け入れられる」ことを勧めている(8:12)。9章で、8章よりもさらに強く感情に訴えて「募金」を促すのは、8章と同様に「募金」が集まっていない状況であり、あるいは「募金」についてのその後の情報をまだ得ていない状況である。このようなことから、8章と9章は異なった時点で書かれたにもかかわらず、その間の時間経過がそれほどなく、「募金」が集まっていないコリント人との関係では、状況の変化がない中で書かれたのである。

(5) 8:8-9と9:7c-8

8:8と9:7c-8では8章と9章の第二の「範例」として、それぞれ「キリスト」と「神」が挙げられている。すなわち「富んで」いたにもかかわらず、自らを「貧しく」した「主イエス・キリストの恵み」について言及した後に、「全ての恵み」の源である「神」について、さらに遡って言及するのである。ここにも、8章と9章は別々の手紙ではなく、9章は8章の議論を前提にして書かれ、それを補って修正する姿勢が見られるのである。それと関連して、8章では「募金」は「キリストの恵み」を受けて「愛」があるか否かの「テスト」(8:8)とされるが、9章では「恵み」と「愛」の源である「神が」施す人々を「愛する」(9:7c)と「愛」についての思想が補足される。

(6) 8:13-15と9:7c-10

8:13-15と9:7c-10で、倫理的根拠として「募金」の理念が述べられている。8:13-15では、「平等」という言葉で、経済的・物理的な意義が説かれ、9:7c-10では「義」という言葉で、宗教的・精神的な意義が述べられている。これはパウロが後に「肉的」(*σαρκικός*)な面と「霊的」(*πνευματικός*)な面というパウロ的な言葉で表現で、要約してまとめ、エルサレムの貧しい聖徒と豊かなコリント人が将来立場が逆転した時の相互扶助という思想(8:13-15)を改めて、「霊的なもの」と「肉적인もの」の現時点における相互扶助に修正する(ローマ15:27)。このことから明らかなよ

うに、9章の「募金」の理念は、8章の「募金」の理念を前提にして、それを補って修正するのである。

以上の諸点から明らかなように、8章と9章は、同じ読者を相手にして意味が成り立つように意図されており、8章がコリントに宛てられた手紙であり、9章がアカイア<sup>(81)</sup>に宛てられた別の読者を相手にする手紙ではない。また、8章よりも9章が先に書かれたのではなく、8章と9章はこの順序で書かれたのである<sup>(82)</sup>。しかし、9章は8章の間にはしばらくの時間経過があったことも事実であるが、コリントに手紙が送られる時点では、第二コリント書1-9章は一つの纏まった手紙として送られたのである。

もし以上の議論が正しければ、8、9章の議論は、1-9章の手紙の中心的な「命題」(propositio, 1:12-14)である「誇り」という中心的なテーマとも一致するのである。パウロはコリント人に対して抱いているのと同じ「誇り」をコリント人もパウロに対して抱くように望むが(1:14)、そのために「寛大さ」(*ἀπλότης*)と「純粋さ」(*εὐλικρίνεια*)<sup>(83)</sup>に訴える(1:12)。だが、この「寛大さ」と「純粋さ」は、実は1-9章の議論全体の枠組みを支配しているのである。すなわち「寛大さ」と「純粋さ」はキヤスムの対応して、1-7章(特に2:14-7:4)では、宣教活動の一面である福音を語る使徒職の「純粋さ」を弁明し(2:17。4:2、参照)、8、9章では、宣教活動のもう一面である「募金」への「寛大さ」を訴えるのである。

1-7章で使徒職と福音についてコリント人に対してパウロに「誇り」を持つように訴えた後で、「悲しみの手紙」への応答で、パウロのコリント人についてのマケドニア人に対する「誇り」が「恥」にならなかったように(7:14-16)、「募金」への応答でも「誇り」が「恥」にならないように一言触れ(8:24)、それを改めて補足して「この部分の誇り」(9:3)が「恥」(9:4)にならないようにと「募金」を再度促すのである。

それでは、なぜパウロは同じコリントの読者に対して、8章と9章で同じ状況で異なる内容を述べて<sup>(84)</sup>「募金」への要請を繰り返すのであろうか。それは、修辞学的な感情に訴える「強調」(*ἀύξησις*, amplificatio)<sup>(85)</sup>によるのである。パウロが「募金」への要請を手を変え品を変えて繰り返すのは、入念に「募金」の再開と終結を促し

て「強調」するためである。しかも、「強調」のために、8章ではマケドニア人とキリスト、9章ではコリント人と神、という2組の「範例」が用いられるが、8章と9章のマケドニア人とコリント人、キリストと神、という2組の「範例」が「比較」(comparatio)<sup>(86)</sup> されて「強調」されるばかりでなく、8章から9章に移ると「範例」が「強化」(incrementum)<sup>(87)</sup> されて「強調」されるのである。こうして、8章よりも9章の方が、さらに感情に訴える内容になっているのである。

## 註

\*1999年9月16、17日に金城学院大学で開催された日本新約学会第39回大会で拙稿「第二コリント書10-13章の書簡理論的・修辞学的分析」(『ベディラヴィウム(原始キリスト教とヘレニズム文庫紀要)』第50号〔1999年〕、1-25頁、所収)を発表し、2000年9月7、8日に立教大学で開催された第40回大会で拙稿「書簡理論と修辞学の視点から見た第二コリント書1-9章と10-13章の関係」(『敬和学園大学研究紀要』第10号、〔2001年〕、89-118頁、所収、「同上」(短縮版)『新約学研究』第29号〔2001年〕、21-36頁、所収)を発表した際に、西南学院大学の青野太潮教授から二度に亘って8章と9章の問題について質問を受け、それぞれの場で口頭で答えた。本稿では、それらを補って青野教授の問いに改めて新たな視点で答えようとするものである。本稿は、2001年9月13、14日に関西学院大学で開催された日本新約学会第41回大会で発表した原稿である。

- 1 山田耕太「第二コリント書1-9章と10-13章の関係」参照。
- 2 研究史的回顧では特に以下を参照。V.P.Furnish, *II Corinthians*, New York: Double Day, 1984, 429-433; H.D.Betz, *2 Corinthiaians 8 and 9*, Philadelphia: Fortress, Press 1985, 3-36; R.Bieringen, "Teilungshypothesen zum 2.Korintherbrief: Ein Forschungsüberblick," R.Bieriger & J.Lambrecht, *Studies on 2 Corinthians*, Leuvan: Leuvan Univ.Press, 1944, 67-105, esp.98-105; M.E.Thrall, *The Second Epistle to Corinthians*, vol.1 & 2, Edinburgh, T.T.Clark, 1994 & 2000, vol.1, 36-49.
- 3 C.K.Barrett, *A Commentary on the Second Epistle to the Corinthians*, London: Adam & Charles Black, 1973; Furnish, 2 Cor.
- 4 A.Hausrath, *Der Vier-Capitel-Brief des Paulus an die Korinther*, Heidelberg: Bassermann, 1870; J.H.Kennedy, *The Second and Third Epistles of St.Paul to the Corinthians*, London: Methuen, 1900; A.Plummer, *A Critical and Exegetical Commentary on the Second Epistle of St Paul to the Corinthians*, Edinburgh: T.T.Clark, 1915.
- 5 J.S.Semler, *Paraphrasis II. Epistolae ad Corinthios*, Halae

- Magdeburgicae: Hemmerde, 1776; H.Windish, *Der zweite Korintherbrief*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1924; R.Martin, *2 Corinthians*, Waco: Word Books, 1986; Thrall, *2 Cor.*
- 6 K.F.Nickle, *The Collection*, Naperville: Alec R.Allenson, Inc., 1966; P.Lang, *Die Briefe an die Korinther*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1986; J.Héring, *The Second Epistle of Saint Paul to the Corinthians* (ET), London: Epworth, 1967 (1953); V.D.Verbrugge, *Paul's Style of Church Leadership Illustrated by His Instructions to the Corinthians on the Collection: To Command or Not to Command*, San Francisco: Mellen Research Univ.Press, 1992.
- 7 R.Bultmann, *Der zweite Brief an die Korinther* (2.Aufl.), Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1987 (1975).
- 8 W.Schmithals, *Die Gnosis in Korinth: Ein Untersuchung zu den Korintherbriefen*, Göttingen: Vanderhoeck & Ruprecht, 1956; idem, "Die Korintherbriefe als Briefsammlung," *ZNW* 64 (1973), 263-288; G.Bornkamm, *Die Vorgeschichte des sogenannten Zweiten Korintherbriefes*, Heidelberg: Carl Winter, 1961; idem, "The History of the Origin of the So-Called Second Letter to the Corinthians," *NTS* 8 (1962), 258-264.
- 9 J.Weiss, *Das Urchristentum*, Göttingen: Vanderhoeck & Ruprecht, 1917, 268-272.; P.Vielhauer, *Geschichte der urchristlichen Literatur*, Berlin: de Gruyter, 1975, 153.
- 10 D.Georgi, *Der Armen zu Gedenken: Die Geschichte der Kollekte des Paulus für Jerusalem*, Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verl., 1994 (1965); Betz, *2 Cor.8-9*.
- 11 R.Batey, "The Integrity of II Corinthians," *NTS* 12 (1965), 56-69; N.Hyldahl, "Die Frage nach des literarischen Einheit des zweiten Korintherbriefes," *ZNW* 64 (1973), 289-306; W.G.Kümmel, *Introduction to the New Testament*, London, SCM Press, 1975, 279-293; F.Young & D.F.Ford, *Meaning and Truth in 2 Corinthians*, Grand Rapids, W.B.Eerdmans Pub.Co., 1987; R.Bieringer, "Der 2.Korintherbrief als ursprüngliche

- Einheit: Ein Forschungsüberblick,” R.Bieringer & J.Lambrecht, *Studies on 2 Corinthians*, Leuven: Leuven Univ.Press, 1994, 107-129; J.Lambrecht, *Second Corinthians*, Collegeville: The Liturgical Press, 1999.
- 12 G.A.Kennedy, *New Testament Interpretation through Rhetorical Criticism*, Chapel Hill & London: Univ.of North Carolina Press, 1984; Betz, *2 Cor.8-9*; F.W.Hughes, “The Rhetoric of Reconciliation: 2 Corinthians 1.1-2.13 and 7.5-8.24,” D.F.Watson (ed.), *Persuasive Artistry: Studies in New Testament Rhetoric in Honor of George A.Kennedy*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1991, 246-261; B.Witherington III, *Conflict & Community in Corinth: A Socio-Rhetorical Commentary on 1 and 2 Corinthians*, Grand Rapids: W.B.Eerdmans Pub.Co./ Carlisle: The Paternoster Press, 1995; J.W.McCant, *2 Corinthians*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1999; J.D.H.Amador, “Revisiting 2 Corinthians: Rhetoric and the Case for Unity,” *NTS* 46 (2000), 92-111; H.-M.Wünsh, *Der paulinische Brief 2.Kor.1-9 als kommunikative Handlung: Eine rhetorische-literaturwissenschaftliche Untersuchung*, Münster: Lit Verlag, 1996.
- 13 例えば、Windisch (2.Kor.,242-243)によれば、A (1-7章)、B (8, 9章)、C (10-13章)に分け、それぞれ互いに基本的に別のテーマを取り扱っており、Bは「事務的な手紙」(Geschäftsbrief)である (Cf.Bultmann, 2.Kor.; Betz, 2 Cor.8-9)。また、Martin (2 Cor., xlii)によれば、「話題が変わっている」。S.J.Hafemann (“Letters to the Corinthians,” *The Dictionary of Paul & His Letters*, Leicester: InterVarsity Press, 1993, 164-179, esp.,171,)によれば、「話題が全く変わっている」。しかし、1-7章の使徒的宣教の「務め」(*διακονία*)と8、9章の募金活動の「募金 (奉仕の業)」(*διακονία*)の連続性、あるいは1-7章の「恵み」(*χάρις*)と8、9章の「募金 (恵みの業)」(*χάρις*)の連続性、さらに本論の最後に触れる1-7章と8、9章の「誇り」のテーマの連続性に注目しなければならない。だが、これらの点に注目した研究や注解書はほとんどない。
- 14 この他に「募金」について、“*λογεῖα*” (1 コリ.16:1) という言

- 葉が用いられている。 Cf. Nickle, *The Collection*, 102-111; Georgi, *Der Armen*, 58, n. 215a
- 15 Bultmann, *2.Kor.*, 山田耕太「第二コリント書1-9章の書簡理論的・修辞学的分析」『敬和学園大学研究紀要』第8号(1999年)、1-33頁、参照。
  - 16 山田耕太「第二コリント書1-9章」、参照。
  - 17 Bultmann, *2.Kor.*
  - 18 山田耕太「第二コリント書1-9章」、参照。
  - 19 Plato, *Phaedrus*, 267D. 引用は、藤澤令夫訳『パイドロス』(岩波文庫、1967年)による。
  - 20 Aristotle, *Rhet.*, 3.19. 訳文は、戸塚七郎訳『弁論術』(岩波文庫、1992年)による。
  - 21 Cf. Anon.Seguerianus, 208.
  - 22 Anaximenes, *Rhet.Alex.*, 38.10-11.
  - 23 Ps.Cicero, *Ad Her.*, 2.30.47.
  - 24 Cicero, *Inv.*, 1.52.98.
  - 25 Cicero, *Part.Orat.*, 15.52.
  - 26 Quintilianus, 6.1.1, 6.1.7.
  - 27 Anon.Seguerianus, 203.
  - 28 Apsines, 10.1.
  - 29 H.Lausberg, *Handbook of Literary Rhetoric*, Leiden: Brill, 1998, § § 432-439.
  - 30 Quintilianus, 6.1.7.
  - 31 Aristotle, *Rhet.*, 2.1.1-11, 3.19.
  - 32 Cicero, *De Or.*, 2.185-186, 206-211.
  - 33 Anon.Seguerianus, 6, 227.
  - 34 K.Berger, "Almosen für Israel," *NTS* 23 (1977), 180-204.
  - 35 山田耕太「第二コリント書1-9章」、参照。
  - 36 Betz (*2 Cor.8-9*, 38-53, 60-70, 88-93, 100-126)は、8:1-5、9:1-2に称賛のモチーフを同様に見い出すが、それらを exordium に帰し、8:9-15、9:6-14に論争的モチーフを見い出すが、それらを probatio に帰す。
  - 37 アリストテレス (*Rhet.*1.2.2) は、説得の3つの要素として、論者の「人柄」(*ἦθος*)と聴衆の「感情」(*πάθος*)と「言論」(*λόγος*)そのものを挙げるが、ギリシアの修辞学の伝統がローマに継承

される際に、“*ῆθος*”と“*πάθος*”の区別が曖昧になり、キケロ (*De Or.*, 2.182-184)やクインティリアヌス (*Inst.Or.*, 6.2.9.)は、“*ῆθος*”が「穏やかな感情」、 “*πάθος*”が「激しい感情」とし、“*ῆθος*”を倫理的性格の基礎に位置づける。Cf. J.S.Baumlin, “Ethos,” T.O.Sloane, *Encyclopedia of Rhetoric*, New York: Oxford Univ.Press, 2001, 263-277.

- 38 Cf. Witherington, *Conflict & Community*, 410; Furnish, *2 Cor.*, 408.
- 39 Windish, *2 Kor.*, 286.
- 40 Betz, *2 Cor.* 8-9, 35.
- 41 マケドニア人の「募金」参加が、1-7章の議論の要約であることは、8:2 (*ἡ κατὰ βάθους πωχεία αὐτῶν ἐπερίσσευσεν εἰς τὸ πλοῦτος τῆς ἀπλότης αὐτῶν*)と6:10 (*πωχοὶ πολλοὺς δὲ πλουτίζοντες*)を比較。
- 42 Aristotle, *Rhet.*, 1.2.13, 2.20; Anaximenes *Rhet. Alex.*, 8.1-14; Ps.Cicero, *Ad Her.*, 4.49.62; Quintilian, 5.11.1-12; Apsines, 8; Lausberg, § § 410-421; J.D.Lyons, “Exemplum,” Slone, *Encyclopedia*, 277-279.  
Plummer (*2 Cor.*, 231-238), Windish (*2 Kor.*, 243-249), Bultmann (*2 Kor.*, 258), Betz (*2 Cor.* 8-9, 41-42, esp. 41 n.5), Martin (*2 Cor.*, 255)は、8:1-5が「模範」 (*Vorbild*, *model*)であることを正しく認識している (cf. *τύπον*, 1テサ 1:7, フィリ 3:17)。
- 43 Lausberg, § § 2, 19.
- 44 「対比」とは、過去の自分の行為との「比較」である、cf. Apsines, 10.49. Windish (*2 Kor.*, 244)は、この「対比」に気づいている。
- 45 「比較」は、現在の他人の行為との「比較」である、cf. Apsines, 10.50.  
8:1-7でなく、8:1-6あるいは8:1-5、6、7で区切る Windish (*2 Kor.*, 249-250), Betz (*2 Cor.* 8-9, 53-56), Furnish (*2 Cor.*, 415-416), Martin (*2 Cor.*, 259-262)らは、この「比較」に気づいていない。
- 46 Aristotle, *Rhet.*, 2.6; *Eth.Nich.*, 4.9.
- 47 Aristotle, *Rhet.*, 2.11.
- 48 O.Bauernfeind, “*ἀπλοῦς, ἀπλότης*,” *TDNT*, vol.1, 386-387;



- T.Schramm, “ἀπλότης, ἀπλοῦς,” *EDNT*, vol.1, 123-124.
- 49 Aristotle, *Eth.Nich.*, 4.1.
- 50 Plummer (2 Cor., 238-246, esp.240), Windish (2Kor.,251-253), Barrett (2 Cor.,223), Betz (2 Cor 8-9,61, esp.n.70), Thrall (2 Cor. vol.2, 532) は、「範例」であることを正しく指摘している。
- 51 Apsines, 10.52.
- 52 Aristotle, *Eth.Nich.*, 4.1.
- 53 G.Stahlin, “ἴσος, ἰσότης,” *TDNT*, vol.3, 1965, 343-355; T.Holtz, “ἴσος, ἰσότης,” in *EDNT*, vol.2, 1991, 201-202; Georgi, *Der Armen*, 97-98.
- 54 Betz, 2 Cor.8-9, 68.
- 55 Aristotle, *Nich.Eth.*, 5.1.
- 56 第二コリント書では、旧約聖書からの引用句は、それぞれの大きな段落の終わりに置かれている (4 : 13、6 : 2、16-18、8 : 8、9 : 9、参照)。
- 57 Plummer (2 Cor., 253), Windish (2Kor., 268-271), Bultmann (2Kor.,258), Betz(2 Cor.8-9, 93), Martin (2 Cor., 383)は、「範例」であることを正しく認識。
- 58 Aristotle, *Eth.Nich.*, 4.7. Cf.6:7 (ἐν λόγῳ ἀληθείας), 7:14 (ἀλήθεια ἐγενήθη) .
- 59 Aristotle, *Eth.Nich.*, 4.3; J.Schneider, “τιμή, τιμάω,” *TDNT*, vol.8, , 1972, 169-180; H.Hübner, “τιμή,” *EDNT*, vol.3, 1993, 357-359.
- 60 Aristotle, *Eth.Nich.*, 4.7.
- 61 Aristotle, *Eth.Nich.*, 4.3.
- 62 Cf.1:23 (φειδόμενος), 6:12 (στενοχωρεῖσθε), 7:2 (χωρήσατε) .
- 63 G.Kittel, “αὐτάρκεια, αὐτάρκης,” *TDNT*, vol.1, 1964, 466-467; “αὐτάρκεια,” *EDNT*, vol.1, 1990, 179.
- 64 G.Schrenk, “δικαιοσύνη,” *TDNT*, vol.2,1964, 192-210; K.Kertelge, “δικαιοσύνη,” *EDNT*, vol.1, 1990, 325-330; Berger, “Almosen.”
- 65 Windish (2Kor., 280-286) は、9 : 11-15が「感謝の言葉」という一つの段落を成すことを正しく指摘している。
- 66 Betz, 2 Cor.8-9, 120-122. 「称賛」「感謝」「願い」は、2 コリ 1 : 3-11、フィリ 1 : 3-11にも見られる。「称賛」と「感謝」

は、2 コリ 4 : 15にも見られる。

- 67 Schmithals, "Brifsammlung," ; Héring, *2 Cor.*, xiii; Bultmann, *2.Kor.*, 258; Vielhauer, *Geschichte*, 153; Verbrugge, *Paul's Style*, 100-104.
- 68 Windish, *2.Kor.*, 286-288; Georgi, *Der Armen*, 57; Betz, *2 Cor.8-9*, 90-97, 139-140.
- 69 1 コリ 12 : 3、15 : 1、ガラ 1 : 11, cf. Betz, *2 Cor.8-9*, 41, n.4.
- 70 1 コリ 7 : 1、8 : 1、cf. Thrall, *2 Cor.*, vol.2, 521, n.85.
- 71 Windish, *2.Kor.*, 268-269; Bultmann, *2.Kor.*, 258; Betz, *2 Cor.8-9*, 90-91. Betz (*2 Cor.8-9*, 90-91), Verbrugge (*Paul's Style*, 100-101), Thrall(*2 Cor.*, vol.2, 564) は、" *γáp* " は 8 章と 9 章が現在の形に結び合わされた編集の段階で、後から追加されたと想定するが、それを裏付ける証拠はない。
- 72 Plummer, *2 Cor.*, 252; Barrett, *2 Cor.*, 232. S.K.Stowers ( " *peri men gar and the Integrity of 2 Cor.8 and 9,* " *NovT* 32 [1990], " 340-348, esp.347) は、8 : 24 - 9 : 5 が「一つの単位である」と指摘する。
- 73 Stowers, " *peri men gar.* "
- 74 1 テサ 1 : 7、4 : 9、5 : 1。  
Bultmann (*2.Kor.*, 258) は、「聖徒たちへの募金」という表現を 9 : 1 で導入しているのは、8 章と 9 章が別の手紙であり、9 章が先に書かれた根拠の一つにしている。そうではなく、それは 8 章と 9 章の執筆に多少の時間経過があるためである。
- 75 Windish, *2.Kor.*, 270.
- 76 Bultmann, *2.Kor.*, 258.
- 77 Stowers, " *peri men gar,* " 346.
- 78 Lausberg, § § 582-585.
- 79 Bultmann, *2.Kor.*, 258.
- 80 これらは、修辞学の専門用語であり、パウロはそれらを用いて説得しようとする。Cf. M. Heath, *Hergomenes On Issues: Strategies of Argument in Later Greek Rhetoric*, Oxford: Clarendon Press, 1995, 249, 255.
- 81 パウロはしばしばローマ帝国の地方名で中心都市を示唆する(例、1 : 8)。すなわち、「アカイア」(9 : 2) は、「アカイア」州を指すのではなく、「コリント」を暗に示唆するのである。

「アカイア」州に離散する信徒たちにも（1：2）、第二コリント書1－9章と同じ手紙が回覧されていたと思われる（コロ4：16、参照）。

- 82 Plummer, *2 Cor.*, 252; Barrett, *2 Cor.*, 12, 232; Furnish, *2 Cor.*, 429-433; Martin, *2 Cor.*, 282; Thrall, *2 Cor.*, vol.2, 565.
- 83 Bultmann (*2Kor.*, 36-64, 73, 103) は、「純粹さ」(*εἰλικρίνεια*) が、1：12－2：13、7：5－16で支配的であるばかりでなく、「誇り」と表裏一体を成した重要な概念であることを正しく指摘している。
- 84 Barrett, *2 Cor.*, 232.
- 85 Ps.Cicero, *Ad Her.*, 2.30.47-2.31.50; Cicero, *Inv.* 1.53.100-1.54.105; *Part.Orat.*, 15.52-17.58; Anon.Seguerianus, 230; Apsines. 5.21; Lausberg, § 259.
- 86 Lausberg, § 404.
- 87 Lausberg, § § 402-403.

## Relation between 2 Cor. 8 and 9 in Terms of Rhetoric and Ethics (summary)

### 1. Historical Retrospect

The relation between 2 Cor. chs. 8 and 9 is classified into four types.

- (1) Identifying chs. 8 and 9 with the letter of chs. 1-7 (Plummer, Barrett, Furnish)
- (2) Identifying ch. 8 with the letter of chs. 1-7 (Semler, Windish, Martin, Thrall; Nickle, Lang, Héring, Verbrugge; Bultmann, Bornkamm, Schmithals)
- (3) Identifying ch. 9 with the letter of chs. 1-7 (Weiss, Vielhauer)
- (4) Chs. 8 and 9 as independent letters (Georgi, Betz)

Recent rhetorical criticism on 2 Cor. is divided into partition theories (Kennedy, F.W. Hughes) and unity theory (Witherington, McCant, Amador). My point of view is close to that of H.M. Wüsh, but very different from his on chs. 8 and 9.

### 2. Relation between Chs. 1-7 and Chs. 8-9

Paul uses “*διακονία*” (ministry) and “*χάρις*” (grace) for the words of the collection for the poor saints in Jerusalem with several other words, and these are central concepts to defend his gospel and apostleship in chs. 1-7, which indicate that chs. 8 and 9 are conclusions (peroratio) of the rhetorical discussion of one side of his ministry in chs. 1-7 in order to resume another side of his ministry, the suspended collection by the suspicion against him.

Weiss-Bultmann and Schmithals-Bornkamm think that 2:14-7:4 is independent from the rest of chs. 1-7. But they overlook the fact that typical motifs of suffering, consolation, sorrow and joy in 1:1-2:13, 7:5-16 are also seen in 2:14-7:4, particularly in 7:4, as well as in chs. 8 and 9, which indicates the facts that 2:14-7:4 is not an independent fragment but a digression of the rhetorical discussion and that chs. 8 and 9 are continuation and conclusion of chs. 1-7.

### 3. Function of Rhetorical Conclusion (Peroratio)

By the survey of conclusion in rhetorical handbooks (Aristotle's *Rhetorica*, Aristotle's *Ad Theodectum*, Anaximenes' *Ad Alexandrum*, Ps.Cisero's *Ad Herennium*, Cicero's *De Inventio*, Quintilian, Anon. Seguerianus & Apsines), function of conclusion is plural and reduces its number from four, three to two and finally two types of conclusion of one function. In the process of this transition, the function of renewing the memory by the summary of discussion (ἀνάμνησις, enumeratio) and that of affecting the behaviour by appealing to the emotions (πάθος, affectus) which is divided into emphasis (αὐξήσις, amplificatio), indignation (δείνωσις, indignatio) and compassion (ἐλεός, commiseratio, conquestio).

### 4. The Type of Rhetorical Conclusion of Chs.8 and 9

The type of rhetorical conclusion of chs. 8 and 9 is that of one function appealing to the emotions. Its basic motives are praise (8:1-7, 16-24, 9:1-5) and rebuke (8:8-15, 9:6-10) in a sense of the analytical words of Aristotle's *Ad Theodectum*.

### 5. Rhetorical and Ethical Analyses of Chs. 8 and 9

In ch.8 Paul mentions Macedonians as the first example (παράδειγμα) with comparison (παράθεσις) with Corinthians in 8:1-7, who are in a lot of "sufferings" "joyful" with the grace and in extreme "poor" but "rich" with generosity described by the paradoxical double contrasts (antextaseis), appealing to the emotions of shame and pride. Ethics mentioned here is generosity (ἀπλότης).

Paul refers to Jesus Christ as the second example (παράδειγμα) in 8:7-15 with the paradoxical double contrasts (ἀντεξετάσεις) of Jesus being "rich" but became "poor" in order to "enrich" the "poor", appealing to the emotions of competing feeling and willingness by the way of checking (δοκιμασία) their love. Ethics referred here is equality (ἰσότης).

In ch.9 Paul at first brings up Corinthians who prepared the collection with willingness and zeal as the first example (παράδειγμα) but they could be anti-example (ἀντιπαράδειγμα) as it is suspended,

described by the contrast (ἀντεξετάσεις) of preparedness and unpreparedness with comparison (παράθεσις) of Macedonians in 9:1-5. The emotions appealed to are shame and zeal and ethics mentioned here is honour (τιμή).

Paul states God as the second example (παράδειγμα) in 9:6-10 with double comparisons (συγκρίσεις) of greed and blessing, sorrow and joy, appealing to the latter two feeling. Ethics talked about here is righteousness (δικαιοσύνη).

If the above mentioned is right, the first examples in chs.8 and 9, Macedonians and Corinthians, are in contrast and ethics are generosity and honour. The second examples are Christ and God, and ethics there are “equality” and “righteousness” .

## 6. Relation between Ch.8 and Ch.9

The expression of “περὶ μὲν γάρ” (9:1) indicates that it refers to the reason, grounds and explanation previous to it (Stowers), thus ch.9 is not independent from ch.8 but attached to it.

The ethical reasons of the collection are mentioned in 8:13-15 as economical and physical one with “equality” on one hand, and in 9:7c-10 as religious and spiritual one with “righteousness” on the other. These are referred as two sides of the meaning of the collection, physical (σαρκικός) and spiritual (πνευματικός) ones, in Rom. 15:27. With this fact and others, particularly from the observations that the thanksgiving, praise and entreaty in 9:11-14 are summaries of chs. 8 and 9, it is clear that the discussion in ch.8 continues to and comprise with that in ch.9.

Thus chs.8 and 9 are written in this order as conclusions of chs.1-7 and sent to Corinth with a slight time lapse between chs.8 and 9.